

## 専攻紹介：酪農専攻

酪農専攻では、現在、1年生10名と2年生11名が在籍しています。

実習では、ホルスタイン種を主体とした搾乳牛を25頭、肥育牛は交雑種（ホルスタイン種と和牛のF<sub>1</sub>）やホルス去勢を約15頭、育成中の子牛・若牛約30頭の合計70頭前後を飼養しています。特徴のある乳製品を生産して6次産業化を考える酪農経営もあることから、本校でもジャージー種の乳牛を導入しました。また、肉用牛として受精卵移植による黒毛和種（和牛）も飼養しています。

飼料は購入飼料に加えて、本校の学習ほ場で栽培する牧草やトウモロコシなども給与しています。

学生は酪農家の後継者や農業高校で牛の飼養経験者もいますが、本校入学後に初めて牛に触れたという学生も少なくありません。でも大丈夫！ 厳しくも暖かい先生方の指導と繰り返し実施される作業実習、加えて先輩の助言で入学後4か月もすれば牛の扱いや飼養管理に自信が持てるようになります。



ミルクングパーラーでの搾乳

年間20回ほど見られる乳牛の分娩は、学生にとっては貴重な経験です。母牛の産みの苦しみを共に感じながら、新しい生命誕生に学生達は心躍らせて介助に当たっています。生まれたばかりの子牛が乳を飲もうと必死に吸いついてくる様子は感動ものです。一方、分娩事故等で傷ついた牛には、ペットではない、産業動物としての割り切った感情が必要であることも学びます。常に生死と向かいあうのが畜産なのです。



分娩直後の子牛介助

畜産に関する飼養管理全般や生理・繁殖などを1年生で学んだ後は、それぞれ研究テーマを定めてプロジェクト学習を開始します。そして2年間の集大成として、プロジェクト学習の成果を卒論にまとめます。

本年度は、野菜残渣や100%自給飼料による乳牛の飼養や、敷料の違いによる臭気対策など、牛乳生産や畜産環境といった幅広いテーマで取り組んでいます。本校は飼養する牛の頭数が多いため色々なテーマのプロジェクト学習が可能で、問題意識さえ明確なら面白い研究に取り組むことができます。

土日や祝日、夏休み等の学生休業日は、当番学生だけで家畜管理をします。責任ある作業を限られた人数で行うため、遅刻やサボりは厳禁です。こうした日常が学生同士のお互いを思いやる気持ちを醸成させ、専攻内での結束力をより強いものとしており、養豚・養鶏専攻も含めた本校畜産課程の特徴でもあります。

## 施設野菜専攻

施設野菜専攻は、1年生11名、2年生12名が、愛知県で多く生産されているトマト、ミニトマト、ナス、キュウリ、温室メロンなどを栽培し、プロジェクト研究に取り組んでいます。

7月にいったん栽培が終わり、有機物の投入や水耕プラントの清掃・消毒といった栽培ほ場の準備に入ります。8月に入ると播種、幼苗定植を行うトマトは早速定植です。本年度は、プロジェクト研究に野菜の「味」についてこだわることとし、おいしい品種の選択や水分制御による味の変化などを追求する予定です。

トマトは、水分制御により食味は向上することがわかっていますが、果皮が硬くなり食感が劣ることがあります。同じ管理をしても皮の硬さに差がないか、現在普及している品種を比べて、より食感到優れたものを探そうとしています。こうした観察の積み重ねによって、おいしいトマト作りを研究していきます。キュウリは、多くの品

種の中からおいしい品種を選んで研究します。さらに、果実に白い粉が付くブルームキュウリの食味も再度評価しようと、プロジェクト研究で比較をしています。

また、燃油価格が高騰を続けていることから、より効率の良い暖房方法をプロジェクト研究として取り上げました。福岡県の農業試験場が開発した局所加温技術で、設置に手間はかかりますが、燃油使用量の削減につながらないかと期待しています。

8月から定植したキュウリ、トマトは間もなく出荷時期を迎えます。食味にこだわった果実の評価は、糖度などの数字も大切ですが、実際食べていただいて評価をしたいと考えています。学生に加え、先生方やできれば毎週行われる農大の直売所のお客様にも協力いただけないかと考えています。この農大情報をお読みのみなさん、是非農大にお越しになり、学生がつくった野菜の味の感想をお聞かせください。

